東アジア日本語教育・日本文化研究学会報告 209

新羅大学院特別教授　藤井茂利

福岡に集まった会員に会長から今期限りで退任の意志が告げられ、理由が「高齢のため」であれば止むを得ない、と言うことになった。福岡の会員は会長を入れてわずか3名であるが、この学会の中心メンバーである。

次期会長の候補には福岡の会員の中からという意見になり、中島和男副会長という意見になる。当然の結果であると思われ、事実その通りになったが、世の常として最初は断る意見を述べる。中島会員も同様「自分は日本語の教員でないから日本語教育が学会名になっており会長には如何であろう。」と述べられた。

この学会は日本語教育に関する論の発表が多いのは確かであるが、学会名は「日本文化研究」となっており、日本の文化、文学に関する発表もされている。中島先生は毎回必ず「記憶文化」に関する発表をしておられ会長になられても何等問題はない。との意見が出され中島副会長も「それなら」と会長を承諾された。次の会長へのセレモニーは終った。

この経過を8月22日の理事会にかけ承諾を得ることにした。一つの大きな仕事をしたような感がなされた。

金会員が鞄の中からポスターのコピーを出した。11日の昼に韓国の事務局からFAXが届いたという。ポスターの本物はまだ日本には届いていない。今年の招待講演は誰であろう、と思ってその部分を見せてもらった。驚いた事にその欄には「藤井茂利(学会会長)とある。」発表時間は10時から10時40分となっている。

6月のレジメ集に出す要旨は発表時間20分に合わせた内容にしている。題目もレジメ集には「道後温湯碑」の中の「給」としている。20分発表に合わせた題目であり用意していた内容の紹介である。

発表時間が40分であれば20分間発表内容を加えなければならない。どうすれば良いかを考えることになった。

8月12日の3名の理事会は次回の会長候補を22日の正式理事会に出すことで閉じ後は懇親会となった。

8月22日は14時タクシーで西南学院大学に出かける。4月の時と同じ名誉教授室にオンラインの装置をして中島会員が待っていた。

15時保坂会員の司会で理事会が始まった。会長挨拶は例の通り短くする。そして'22年限りで会長を辞する提案をする。理由は高齢90歳になり体調不良のためとした。理事会でこの提案は認められ、8月27日の総会に掛けることになった。

次に会長候補のためである件に話題が移り、8月12日に福岡の会員で決めた「中島和男副会長」を会長に推す提案を示した。この提案を司会者が受け取りオンラインに参加している会員に意見を聞くことになった。司会者がオンラインで中国2名、日本5名、韓国2名の理事に意見を聞き全会一致であるとの報告がなされ総会に掛けることになった。

金会員が会計の収支報告が北九州からなされ理事会を閉じた。

8月27日、学会発表会の日が来た。韓国新羅大学(釜山市沙上区)をオンラインの基地に中国は大連外国語大学、天心科技大学、成都東軟学院、山東外字大学の他、韓国からは新羅大学から多数の発表者、日本は日本大学、四国学院大学、青山学院大学、岡山理科大学、高知県立大学など凡そ50名の発表者がオンラインで結ばれた。

招待講演者となった会長は予想外の20分間の話しを「給」の用法から始めた。「給」は「賜」と同等という説がある。

古事記上巻に

以此鉤給其兄時

此の鉤を以て其の兄に給はむ時

中略

云而於後手賜

と云ひて後手に賜(たま)へ

とあり、失った鉤兄に渡す動作は「賜(たまう)」と「給」は全く同等と説明される。

日本の古語辞典を見ると

岩波古語辞典は

たまひ［賜ひ・給ひ］

角川古語辞典は

たまふ［賜ふ・給ふ］

時代別国語大辞典（三省堂）は

たまふ［賜・給］

と「賜」「給」が併用されて、同等の形になっている。

「漢語林」(大修館書典)によると「給」は糸をつむぐとき切れればすぐにつなぎ合わせにす」意とされ、「賜」は「腕をつきだすの意で」目上が目下に金品をおしやって与えるの意味で用法に相違があると感じられ、注意が必要である。